広島大学附属福山中・高等学校
中等教育研究紀要　第33巻

国語の授業における作文

——最初の高等学校国語の授業から——

金本　宣保

大岡信「言葉の力」を教材として、高等学校に入学して最初の国語の授業をした。はじめに、教材の文章を読まないで、「言葉とは」どういうものだと考えているか作文を書かせ、授業で文章を読解して、はじめの各自の作文を読みなおさせ、教材の文章から学んだことを作文に書かせた。学習したことを自己で確認することが自然にできた。
吉野弘の講演で、子供の詩で多くのものが「鳥になって空をとびたい」と書くという話をきき、何を生徒の作文に求めているのかを改めて問い考えた。作文を書かせる授業は、文学作品の創作をめざしているのではなく、学習の一場面であり、教室という場で指導の問いや教材の文章を考えて表現することをめざしている。—というのが一応の結論である。

1.「鳥になって空をとびたい。」という言葉

吉野弘が講演で、中高校生の詩のコンクールの選をよくするが、応募作品の90パーセントが、「鳥になって空をとびたい。」というものであるという話をした。詩は型にはまった見方からぬけ出た所に美を見い出すものだという文脈の中で触れたものである。1991年11月１日の広島県国語教育研究大会での講演で、小中高の先生が聞いていて、吉野弘が、勉強、勉強で忙しいから時には解放されたいと思うのでしょうとつけ加えた言葉に、会場は笑いに包まれた。私は、「鳥になって空をとびたいという詩」という言葉が気になった。

その夜、大会役員をしていた関係で、吉野弘を迎えて歓談する会に参加してそのことについて問うてみようと思いつつ問うことができなかった。他の人が次々と問い、吉野弘はよくそれに答え、雰囲気にそぐわないと思ったし、問いが明確にならなかったからである。会もたけなわとなり、吉野弘に色紙を書いてもらうことになった。私は、思潮社の現代詩文庫の一冊「吉野弘詩集」を持っていっていて、ただその詩集にはない詩をこうだったのではないかと言い、吉野弘はかなり酔っていてそうだったかなと、言いながら書いてくれた。

私は／あなたの風だったのかも知れない／「生命は」より

ところが、後で調べてみると、詩の言葉は違っていた。

私もあるとき／誰かの虻だったのだろう　　（四連）

あなたもあるとき／私のための風だったかもしれない。（五連）

違っていて、五連とだけ比べれば、私の思い違いは、不遜なのであるが、四連、五連をまとめれば、私の記憶も大間違いではないだろう。そんなこともあって、吉野弘の言葉は忘れられない。

私たちが国語教育で作文を書かせるとき「鳥になって空を飛びたい。」という文章を求めているのであろうか、「鳥となって空を飛びたい。」という詩を越えたものを期待しているのであろうか。授業で教える生徒のほとんどは詩を書くことなどに縁が無いのであるが、生徒全員に作文を書かせる授業をしてきた。その時、何を求めているのであろうか。

時に思い出し、考えるのであるが、明確な答えを出すことができない。

中村雄二郎が「哲学の現在—生きること考えること—」（岩波新書）の「Ｖ共同社会と歴史—見える制度と見えない制度」で次のように述べている。

「或るドイツの詩人（エンツェンスベルガー）はうまい例を挙げて説明している。（略）それは、若いとき祖父と祖母とが互いに宛て書いた愛の手紙の数であった。ところで、これらの手紙を分析してみると、ある事実が明らかになった。これらの愛の手紙は、その時代やその社会に広く読まれた作家の小説や手紙の一つの反響であり反映であるということである。とくにゲーテの小説や手紙は、祖父母の世代の多くのドイツの若者たちに、学校や家庭での読書を通じて、恋愛の手順や感情の表現について一定の形式を与えずにはおかなかった、と（略）

このように、私たち人間は、社会において共同生活を営むなかで、意識的および無意識的に実に多くの制度、つまり合目的な秩序を形づくり、それらを仲立ちとして互いに結びついている。というよりむしろ、そのような結びつきによって共同社会が形づくられている。」

中村雄二郎は、「見えない制度」を否定すべき対象としている訳ではない。そんなことはできるはずもない。制度への批判は、例えばエコロジーという形で表れていて、納得できる面がありながら、一面的ではないかとも思われる。特に教育においては、蓄積されたものを（「見える制度見えない制度」を）学ばせるということが中心となる。大きくみれば、そういうことになるが、個々の生徒をみると、それぞれ自主的に生きている一人一人である。

先日、1992年の年末、担任している生徒とその保護者と担任の私とが懇談をしたが、生徒は大学へ行って作家になりたいという、そういう願いを持って大学へ進学するのもいいだろうと思って話していたところ、母親に「この子は作家になることができるでしょうか」と問われた。私はすぐに何も言うことはできず、少し間をおいて「高校は、いやほとんどの学校は、作家を育てるところではありません。日本では作家は、学校と別の世界で育ちます」と言った。「作家になるのはプロ野球選手になる以上に難しい，もちろん○大学へ入るよりずっと難しい」と言うと、母親は深くうなづいていた。それでも生徒には「君の文章は面白いところがある。ただ、勢いがよすぎて、何も抵抗がなく書いている、というところが、国語を教えている者からみると物足りない」といい、「ただ国語の授業でいい文章を書く生徒が作家になるという訳ではない，例えば、この学校を卒業して作家になっている川西蘭だって国語の授業で特に目立っていたということではなかったそうだ。」と言った。生徒は、私の言うことを認めながら、自分の能力については自信があった。私は不安に思う所もあるが、今は、その夢を打ち消すべく指導すべき時ではないと思った。

文章を読み書く力を養う、特に、文章を読み味わう生活をする人を育てることができればいいと思いはするが、原則として、国語教育は文学者を育てようとするものではない。

では、何を目的として、作文を書かせているのか。

国語では書く力があると評価された生徒は、文学者にはならなかったが、広い意味での学力を身につけていたことは確かである。そして、様々の分野で、理科系の学問の分野でも、あるいは芸術の道に進んでも、その力は生きていると私は思っている。

「鳥になって空を飛びたい」は詩としては無価値である。しかし、「鳥になって空を飛びたい」と心をはばたかせることによって、人の書いた文章が、生きたものとして読めるようになり、自らの、その時、その時を確認する手がかりとなればいいのではないか。—これが、国語の授業の場に限定しての、一応の答えである。

2．授業のねらいと展開

1991年度、高校1年生の現代文の授業を週2時間担当することになった。高校に入学して最初の国語の授業は、高等学校の国語はどういうものであるかという考えを持たせるものになると考えて計画を立てた。教室は教師と生徒、また生徒と生徒とが出会う場である。当校は、中・高一貫教育であるから、広大附属福山中学校からの入学者も多いのであるが、私は、この学年を中学校時代に教えたことがないので、どの生徒に対しても授業では初めての出会いである。

教材は、明治書院「精選　国語Ⅰ　二訂版」の教科書の二番目の教材、大岡信「言葉の力」である。

ねらいは（1）国語の学習に興味を持つ。（2）「言葉」への自覚を深める。（3）評価文を読む力を養う。

授業の展開は以下の通りである。

		主な学習活動
第1時	「言葉とは」何だろうかを考える。	作文1
	全文通読	自分の体験を発表する。
第2時	「言葉」と「贈り物」の部分の読解。	
第3時	「今日のこの風景を君にあげよう」の理解。	要旨をまとめる。
第4時	「古典」「傑作」の部分の読解。	読書
第5時 第6時	図書室の本を読み紹介文を書く。	作文2
第7時	大岡信と「古今集」について知る。	「氷山」のたとえを、図に描く。
第8時	「ささやかな言葉」の部分の読解	
	「言葉の力」の教科書の文章の後の文章を読む。	作文3
第9時	まとめ「『言葉の力』から学んだこと」	

3．本を読んで書いた紹介文

第5時，第6時に、教科書の文章から離れて、本を選び、読み紹介文を書く学習をした。「言葉とは」何かと言葉の面から文章を考えていく授業のなかで、内容の面に目を向けさせようとした。言葉の世界を広げ、読書に親しませることをねらいとした。また、学校の図書室に親しませるという意図もあった。5月の連休の前に、図書室を授業の場とし、自分の好きな本を選び、借りるよう

に指示した。注意として　1．文学作品（小説・詩）以外のものを選ぶ。2．あとで面白い所を紹介する文章を書く。（連休中に読む）という指示をした。実際に図書室で、中学校から当校にいて、はじめて本を借りる生徒もいて本の借り方を問う生徒がどのクラスにもいた。高校から入学した生徒は、多くの生徒が借り方をききながら借りていた。ただ、学年の終わりにこういうことがあった。クラスで何人かの生徒が、図書室で借りた本を返していない、そのほとんどが、この5月の連休前の授業に本を借り、そのまま返していない生徒であった。

紹介文は、板書で次の指示をした。

題　「最近読んだ本」二百字　二十分

本の筆者と題名　その本を読んで知った興味深い事実（具体的に。全体の紹介ではない。）

感想

生徒の作文例は、次のようである。（以下4年A組の生徒のもの）

例文A

広岡守穂の「男だって子育て」を読んだ。

ここに「家事は奉仕である。奉仕とはもともと相互的な営みであるはずである。一方が他方に家事をおしつけ、他方が一方にいつも奉仕するという役割の固定は、やはり自然なものではないのである。」というようなことが書いてある。私は主婦が家事をするのはあたりまえのことだと思っていた。これを読んだからには、一人で家事をするのは無理としてもせめてしっかりお手伝いをしなくてはならないだろうという気持ちになってしまった。

例文B

高木貞治（さだはる）の「数学雑談」を読んだ。

3ページから〝格子点〟について書いてあったが、平面上に、そのような点をとるという考え方を初めて知った。格子点とは平面上に各一定の距離を置いて平行線を縦、横に限りなく引いて交わった点のことである。そこから、ベクトル、関数へと発展して考えることも知ったのだが、自分もまた、身近な単純な事柄を変化、発展して考えていくこともできるのではないかと、あらためて思った。

第7時のはじめに紹介文の内11名を読ませた。その時、例文Bの生徒は、第3文を書いた時は「…点が、格子点である」と書いていたのだが、朗読発表する時「格子点とは、…のことである。」ときいて分かりやすく変えている。第1時での発表の時、発表する時、分かりやすく変えてもいいと指示したが、すぐ工夫している。

例文Aで、生徒は「お手伝いをしなくてはならないだろう」と書いているが、生活について書いた文章ではそれが実行されているかどうかと指導しなくてはならないだろうが、国語の授業の作文では、書いた気持ちが本当であればよいのではないかと思う。ただ、後にこの生徒に「手伝いをしているかい？」と問い、生徒が笑って「どうかな」ということがあった。

4．はじめの作文と学習のまとめの作文

はじめの作文は、教科書を開く前に、「言葉についての自分の考え方を自覚させ、問題意識を持たせることをねらいとして、次の指示をして書かせた。

題　「言葉とは」　百字　二十分

書き出しの文「言葉とは―である。」（自分の考え）

その文の後で、その定義（考え）を説明する。

授業のまとめで、「『言葉の力』を読み、学習したことを確認し、国語の学習に対する意欲を高める」ために、はじめの作文を生徒が読んで、教科書の内容と比べて、次の指示に従って書かせた。

題　「『言葉の力』を読んで学んだこと」　四百字　五十分

一段「はじめ言葉とは…だと考えていた。」（作文１の引用、あるいはまとめ）

二段「大岡信『言葉の力』に…とあった。」

三段　自分の考え　｛「それで」筆者の考えに近い
　　「しかし」筆者の考えに反対

文例Ｃ　（はじめの作文）

「言葉とは、人と人とのコミュニケーションを深めるものである。たとえば、自分の気持ちを伝えるのも、他人の意見を知るのも言葉を媒介としていて、それなしでは互いに正確に伝えあうことができない。つまり、言葉は人間社会を成り立たすための基盤となっているのである。」

文例Ｄ　（まとめの作文，文例Ｃの生徒）

「私は初め言葉とは、人と人とのコミュニケーションのための手段であり、互いを正確に知るために必要だと考えていた。

ところが大岡信「言葉の力」に「最も相手に伝えたい気持ちは簡単に伝わりにくい……誤解の余地がつねにあることのほうが、人間であるという条件に対しては忠実な生き方という気がする……言葉にはよくわからない部分があっていいのだ。」とあった。

それで、改めて言葉の本質というものに気付いた。気持ちを表す言葉は自分の気持ちを伝える手段であるけれど、コミュニケーションの語が表すような「伝達」の手段とは違う。気持ちは、言葉ではあいまいにしか表現できないのだから、正確に「伝達」される必要はないのだ。だからこそ、そういう未完成な、ささやかな語の組み合わせによって、自分の内面を感じ取ってもらえる力を生みだす言葉の「力」は素晴らしいと思う。よくわからない部分をもつ言葉の力は、薄っぺらでない人間を、広がりを持って表せるということにあるのだ。」

文例Ｅ　（はじめの作文）

「言葉とは、人の意思を相手に確実に伝える事ができ、その事によって社会の文化を発展させることができるものだと思う。たとえばさるには言葉がないので文化というものが成り立っていかないように言葉は人間にとって、たいへん大きな役割を果たしていると思う。」

文例F　（まとめの作文，文例Eの生徒）

「はじめ言葉とは「人の意思を相手に伝えるものだと思っていた。

大岡信の「言葉の力」に日常用いている有りふれた言葉が、その組み合わせ方や、発せられる時と場合によって、突然すごい力を持った言葉に変貌するとあった。

それではじめの私の言葉の考え方は表面上だけの物にすぎないと思った。言葉は確かに相手に意思を伝える事ができるけれどそれだけではないと知った。言葉には、もっと奥の深い意味が隠されている。別に特別な言葉というものはなくて、日常の言葉がすごい力を持つという文を読んで、そう言われてみればそれは当たり前の事なんだと思った。普段私達が使っている言葉以外に言葉なんて存在するはずがないと思った。日常の言葉の奥に人の大きな思いがかくされていると思うと本当にささやかな言葉の力の大きさを感じとれるような気がする。」

文例G　（はじめの作文）

「言葉とは、武器である。肉体ではなく精神を傷つける物の一種である。自分の印象を変えることや、相手をだますことができる。逆に人を幸せにすることもできる。言葉をうまく使うことができれば、世界を変えられる。」

文例H　（まとめの作文，文例Gの生徒）

「はじめ言葉とは「武器だ」と考えていた。

大岡信「言葉の力」に言葉は氷山の一角だとあった。

それで、私は言葉が武器だけでなくいろいろな形に変化する物だと思った。その言葉を発した人の心によってどんな形にも変化するからだ。相手が憎いなら、言葉は武器になるし相手を幸せにしてあげたいと思うなら、言葉は相手にとって喜ばしい物になる。お互いの心が本当に通じ合っているならば、相手の言葉だけで相手の真意がわかる。心が通じ合っていなければ、相手を誤解したり、だまされたりする。この話で思ったことは、本を読むことで氷山の下側の部分を感じとる練習をしているのだと思った。相手の言葉だけで相手の真意がわかるようになることはうれしいことでもあるが、悲しいことでもある。なぜなら、親友だと思っていた人が本当は自分が嫌いだったり、いい人だと思っていたが本当は偽善者だったり、このように相手が身の回りを言葉という服でおおっている、その中まで見ることは、うれしいこともあるが、悲しいことの方が多い。突如このような力が身についたら、精神力の弱い人なら自殺するかもしれない。人はあらゆる生き物を殺す、神がその罪の代わりに人に負わせた罰は言葉なのかもしれない。少しセンチメンタルになりすぎたけど、言葉とは罪深いものだと思った。」

はじめの作文と、まとめの作文との例を三人のものを示したが、はじめの作文をまとめの作文が表現の上では打ち消しているが、もちろん、はじめの作文の内容が間違っていたということではない。中学校までの学習をふまえ、考えたことを、よく書いている。第1時の発表では、それを認めた。しかし、大岡信の「言葉の力」は別の側面を強調していて、そのことを、おやっと思って読み

内容を自分なりに納得してくれればいいのである。

後は、まとめの作文のみを示す。

例文Ｉ

「私は昔、言葉の裏側、隠れた部分について考えたことはありませんでした。本を読むことは読んでいたけれど、ノンフィクションや推理小説などの簡単なものでした。それが今は、一度読んだだけでは一体何が言いたいのかわけのわからない、混沌とした小説ばかりです。

大岡信「言葉の力」では、はっきりした物を求めて本を読むと失望することが多いととれるようなことが書いてあり、ある人にはくずな物もある人にとっては素晴らしい物だということも書いてあります。

そして私もこれには同感で、ついでに言うと同じ人でも時期によって感じ方が違うということもあります。今は、私にとって推理小説は価値の無い物と言えます。同じ文章、言葉を聞いて、何を考えるかで、その人の性格や考え方がほとんどわかりそうです。」

「しかし」と筆者と反対の考えを書いたものが３例あった。それぞれ部分（後半）を示す。

例文Ｊ

「言葉とは、どういうものなのか。と今まで考えたこともなかったが、今考えてみると、ただ単に自分の考えを相手に伝えるもので、人によってそれはすばらしいものになったり、どうしようもなくなったりするものと考えられる。

そして、大岡信「言葉の力」には、その辺に転がっている言葉以外に、すばらしい言葉はないんだ。その組み合わせ方、発せられる時と場合によって、すごい力を持った言葉に変貌するとあった。

ということは、組み合わせ方、発せられる時と場合というものを理解できない人間は、一生すごい力を持った言葉と関わりがなくなるということになる。しかし、それで不幸福になるということはないのだから、言葉の力がすごくならなくてもいいと思う。」

例文Ｋ（部分）

「それで、私は言葉が直接相手に自分の気持ちを伝えるものだと思っていたが、大岡信の言うとおり、言葉は氷上の一角ではないかと思うようになった。

しかし、筆者の言うとおり、私たちは窓をのぞきながら相手の奥まで理解しようとたえず努めているのだろうか。私には、言葉のうわっつらしか見えないような気がする。相手の奥まででなく、手前までしかのぞけないような気がする。」

例文Ｌ（部分）

「しかし、始めの方は納得できるが、後の方は、どうも納得できない。おもしろくないものを熟読すれば、本当におもしろくなるのだろうか。おもしろさがわかるまで、おもしろくないものを読

み続けたら、僕だったらそれまでに精根つきはてて、おそらく不快感ばかりがおそってくる。それなら、おもしろいものを読んで、自分の氷山の下側をふやした方がいいと思う。」

作文の一つ一つを見ると、形式ばったなかに、それぞれ自分らしさをも表している。入学式の時のクラス写真の顔のようである。入学したばかりで知らない他人に対してすました顔をしているが、後から見てみると、それぞれの生徒の個性につながっていくものがうかがわれる。

最後に、再び吉野弘の詩、「生命は」の二連から引用する。

「世界は多分／他者の総和／しかし／互いに／欠如を満たすなどとは／知りもせず／知らされもせず／ばらまかれている者同士／無関心でいられる間柄／ときに／うとましく思うことさえも許されている間柄／そのように／世界がゆるやかに構成されているのは／なぜ？
花が咲いている／すぐ近くまで／虻の姿をした他者が／光をまとって飛んできている
私も　あるとき／誰かのための虻だったろう
あなたも　あるとき／私のための風だったのかもしれない」

授業においては、指導者が虻となって生徒に実をみのらせることが願われる。また、この詩は生徒が指導者の「欠如を満たす」ことをも教えている。